

都ぞ彌生 作詞：横山芳介 作曲：赤木颯次 (1912年(明治45年))

一

都ぞ彌生の雲紫に 花の香漂ふ宴遊(うたげ)の筵(むしろ)
尽きせぬ奢に濃き紅や その春暮ては移らふ色の
夢こそ一時青き繁みに 燃えなん我胸想ひを載せて
星影冴かに光れる北を
人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に 雁(かりがね)遙々(はるばる)沈みてゆけば
羊群声なく牧舎に帰り 手稻の嶺(いただき)黄昏(たそがれ)こめぬ
雄々しく聳ゆる榆の梢 打振る野分(のわき)に破壊(はぶ)の葉音の
さやめく薨(いらか)に久遠(くまん)の光り
おごそかに 北極星を仰ぐ哉

三

寒月懸(かか)れる針葉樹林 櫓の音(ね)凍りて物皆寒く
野もせに乱るる清白の雪 沈黙(しじま)の暁霏々(ひひ)として舞ふ
ああその朔風飄々(ひょうひょう)として 荒(すさ)ぶる吹雪の逆巻くを見よ
ああその蒼空(そうくう)梢聯(つら)ねて
樹氷咲く 壮麗の地をここに見よ

四

牧場(まきば)の若草陽炎燃えて 森には桂の新緑萌(きざ)し
雲ゆく雲雀に延齡草の 真白(ましろ)の花影さゆらぎて立つ
今こそ溢れぬ清和の陽光(ひかり) 小河の濤(ほとり)をさまよひゆけば
うつくからずや咲く水芭蕉
春の日の この北の国幸多し

五

朝雲流れて金色(こんじき)に照り 平原果てなき東(ひんがし)の際(きわ)
連なる山脈(やまなみ)玲瓏として 今も輝く紫紺の雪に
自然の藝術(たくみ)を懐(なつか)みつつ 高鳴る血潮のほとばしりもて
貴(たふ)とき野心の訓(をし)へ培ひ
栄え行く 我等が寮を誇らずや